



新編  
——  
——



江氏乃物縁のおり村とれ天皇の御むとあり 上東門院小  
由せうやぐわりてまよ乃日此はましくにゆりーしれれへき  
物縁なまうんと尸を包給つれと女院の女房式尸如前守  
の時女と  
ゆりーいまぶとゆりすへまことおほとれありすら小  
式尸の尸ゆりゆりいりやなといりーいりゆりゆり  
わりーいりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり





先帝

式部卿宮

年ハ兵アマと云ハ

おとられ申され武アマ

かりまよ

薄雲女院 后々々此口文之  
母后桐壺とせ給ふ  
きりつ乃の更哀うや  
沖門乃の更いさあさつり  
しとたさくもあつくと  
あ人のなけきふそま  
あつとそまろくそま  
くろとろくろく内侍乃

源中納言

若君

後らる後のまらる右兵朱菅院の事此  
忠告 若君に中納言 其れ試案了

ゆみさり 皇座を日ひ

中将

侍従

民ア大物

此三人あはれ人の大將此中とて此  
此とて此父父の此とて此









朱雀院

母弘徽殿太后

相違ふもはかりし長文小  
たらあつひ譲とけ  
てく井一はきをとり  
く小くわ成まき  
ゆけりおりのせがふ  
とくれはくはりし  
か山乃清てはるり  
とすや給

六条院

母相違文衣

きりはかひの長にむしれ  
たまひ三少くもむし  
日少くはまをたにむし  
六あく母はむしにむし  
七少くはまをたにむし  
とすや一原氏乃成  
かりてすく人なり

長文たらかり  
梅えに西え服

一信少つてあふ

落葉書

母一糸

着るれをた  
とれのあひんあ  
れ小方かり給  
二糸の文乃西と  
あひなけき  
らからるるは

とすや

きりの大将

らく通ひ給

一糸文にやあ

とすや

二糸の文乃西

とすや

とすやの長

たらかり

二宮

母一糸

おとの中ね  
をえくい  
乃まんを  
とみあ  
同

かりかり

白兵

母一糸

らり中ね  
之服  
小はむ  
のこれや  
たて中ね  
二文  
とすや

始十二あゝ元服清冷なるひくひのひ  
ううかてこその夜ひまいまの  
かしあり

左大臣の命しまのそとを  
終く見ここゝにひと所  
しつき始め女君といひ

とあらはせられしといふ  
中おとんといふりおまの  
尊一正三位西實深黄同  
是之宰相中おまのまのまのま

大將もままのまのま

なまきしといふまきしといふま

分まさられし内侍のまのま

しと方かてすまのまのまの

二月廿日しらしけしけしけし

乃ゆけしけしけしけしけし

くれ二月しらしけしけしけし

浦しらしけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

院の水しらしけしけし

少く六しらしけしけし

しらしけしけしけしけ

しらしけしけしけしけ

三らしけしけしけしけ

女宮

院の水しらしけしけし

乃ゆけしけしけしけし

くれ二月しらしけしけしけし

浦しらしけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

なまきしといふまきしといふま

分まさられし内侍のまのま

しと方かてすまのまのまの

二月廿日しらしけしけしけし

乃ゆけしけしけしけしけし

くれ二月しらしけしけしけしけし

浦しらしけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

也し林しけしけしけしけし

若君母中君  
しらしけしけしけしけ

女宮  
夕まきしといふまきしといふま

ゆこのあらしけしけしけしけし

りて先づ一ふされど  
あつてのくわあしあ  
まりおとのわりの大細さ  
かり給ふとくく小内大臣  
ら守雲に所従さひ牛車  
ゆりされてまれ中にお入ふ  
おとまり太政大臣目せ  
忠仁と例しあそくく  
唯三指の宣旨とくく

御門内侍傳のPきくせ  
まはりしと成りし  
教のくまふく太上天皇の  
首位とまけ給ひひり  
くれおひいふとくく  
中納のそにんくく  
君といこま人のけけ  
まろくく

り山すし給ふ

夕霧大臣

母養上  
権大臣

あつてのくまふく  
まそやそ母  
おくれとくく  
同長文の殿上  
おとまりえ服して  
あそき海り

大学れりに入て  
寮試とくく  
とくく  
ゆりおははき  
やの二月小文章  
生に何と同年枯  
目乃所あそ  
後朱雀院の御  
ときに何は小  
くく中納あ

中務

母養上

り中納のそ  
のりゆりの目  
まそやそ母  
まろくく  
常陸文  
乃り

中務宮

母養上

やとりまに  
の所たや  
二文と  
く



尚侍——こころはくく  
人

源之位

む先々えん乃そにゆほえ  
ふ多儀より父交乃ゆほい  
ふくくつらんよりふつら  
され一人

姫君

母すけくくくく  
姫君の大臣

父交うせぬくのらくくく  
くくくくおゆほい  
あやらのふゆくときこく  
ゆくくくおゆほい物く  
くくくくくくくくく  
いむゆほいゆほいゆほい  
なりゆほいゆほいゆほい  
くくくくく

中納乃ゆほいゆほい  
くくゆほいゆほい  
まきくくくゆほい

右近中納言

ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

右大納言

ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

若君

母すけり  
若君の位

ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

いとゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

右近中納言

ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

右大納言

ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

中納言

母すけり  
中納言の位

ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい  
ゆほいゆほいゆほい

日宮

紅葉を花にそりし朱薙流  
乃仍華のそりしつあ  
秋風来新花をれより  
のらきこえぬし平香  
廣宮をとり

師宮

雪の中をりし六多流乃  
馬場乃おとせりくく  
むまれきわたり日あま  
乃もむらひくわに乃雪  
の交りしわたりてん  
けりくあり

宇治宮

母河太臣女

りし八葉薙流乃母

山石中宮

母山石工入道  
兼備ら女

女流をれそれ之  
月上宮りありの  
ゆりてうれれ  
秋風りくく  
くくくくく  
くくくくく  
くくくくく  
くくくくく

源宰相中将

母二あ

源は源宮女

りし八葉人かおと  
ゆりてはけり  
三位中将同出  
宰相中将源流  
の今れ女所ひけり  
乃在のせり  
くくく

侍従中將

侍従中將  
秋風をれに白  
交れりせり  
まうてはけり  
くく

頭中將

りし八葉小宮  
は交りしはけり  
秋風をれに白  
交れりせり  
まうてはけり  
くく

きしあまこれりし  
世中もたらはき  
終よへまきさゆい  
しそなまはひ  
ふふとほそか  
世とあそぶ  
さゆのほあひ  
ふふとほそか  
いしすうあそぶ  
ふふとほそか  
まらうのほあひ  
あけてまはひ  
局しすらたわたり  
まふなまはひ  
いそせかまはひ  
乃あまもはひ  
親とあ

中將 母は此上最上御女

いしあまはひ

崇守三位 母同

あまはひ

あまはひ

あまはひ

あまはひ

あまはひ

あまはひ

宣旨 母同

あまはひ

あまはひ

左中將

右大臣

中納言

あまはひ

あまはひ

左中將

あまはひ

あまはひ

あまはひ

あまはひ

右中將 母は此上

冷泉院

母后雲女院  
名幸廿四文  
實云多院中子

紀原賀巻廿二月十日

日しむまれたまふ  
葵小とうらうにたら  
ふの候今廿二月  
御え眼ま一曰局  
中候うとえとく位  
けきかよる葉に位と

王女ゆつりてありお  
させ給と位十八年  
一いぢり十乃こ  
わり

晴絵式下宮

けらふ乃まれ  
らせ給ふり  
ふり大納のちらと  
のりあり

総角

ち文うと給くうら  
ふり大將秘んころ  
実かかりたにあけ  
まれしとくお  
かりそまふ

中君

あけおれと白き  
ましあひくは  
一ニ案渡くひく  
給すお乃ぬこと実  
なり

年替目三君

母中將君文文  
母あひく  
今りい昔  
水方かり

一不文此れあや  
乃時より給信  
のりと申文乃  
けいせ

荒人兵衛作

ふいせま  
けいせ

侍従

たけのり  
尚竹のり

春宮

母  
お乃ぬ  
入文

中君

お乃ぬ  
二文此水方  
三君







きこりてむらり始てわし  
一ふ文此抄に文の考とてさ  
とせりいさかの大將らうさ  
ころをとりせし

先坊

右院のいん  
ととと  
み

秋好中宮

母六条清皇后大長女

あつみのまにみ院たら始  
伴坊下始  
よりてみ

桃園式下宮

ふ  
もた

枋政小方

院のいん  
三  
り夕霧のお  
むし枋政  
てはら

槿舟院

はるのまに  
の始例  
み

あて着る海乃  
春たくれがよ

女五宮

あさく海乃舟渡りうねふじくくういともみぬうあさ  
ふの舟渡りうねふじくくういともみぬうあさ

又文乃舟乃にらりておらぬせがひ  
とくせぬあふまゆね女文のまをう  
すゆせぬれぬくせぬれぬくせぬれぬく  
源氏一の舟乃てやうらうら

蓬生女君

蓬生乃し花乃もれぬ源氏一あまもきよ  
ひんくねかんふらうふくれぬ何くこころ  
ゆねぬれぬきんくあふたのあまもきよ  
すもゆじくかよ

阿耨梨

阿耨梨 君もしうのそに源氏一の  
浦よりゆりかひくくのらひもいひまきよ

常陸宮

掃政太政大臣

乃つ子孫さりし所さるし竹御八幡少多  
ふさといふうとれち者のいふ多く源氏  
此のまふこころきほひのたにれちり  
とてあれしといふれち人ふと夜とみの  
まろくろしうゆつりきあふなり

さるしにれちしとたに源氏のお冠せ  
人けのれちをわけちとひまきとちりせの  
わりまふふちりて致仕の表多りまろく始  
とろくたに太政大臣とれち掃政し始りし所  
乃正月しとせふ源氏のまろく夕霧と物の  
あつら也

致仕太政大臣

母上天皇此二語の二也

相奪此世に凡人がゆるしあの中  
以中ゆしからるるなりし中下

神代  
年堂  
養

相本程大納言

母三宗太政大臣

みとつてれちい童女上  
にせちふたをかおこしに  
右道中将より大り以中物

了之頃中ねと後と事おろ中ねみ  
けくしに控中ねと後事入に控大納言  
女と大將と通とを多に内を信少将  
後氏おと世中此事ともとつら  
たもつるまきこくは内見友のこもふ  
しを政大信も平常し致仕の表もえ  
まうりかひいと結つておと紅梅と  
たりもん一のこもつとあまの物  
こりれそのこもたつらに二条乃おと

い

藤大納言

長文を更

け二人御所の事入後氏乃之来此や  
乃ぬあやこもあひいりこり結り  
し日られおとこも手許まてらり  
あゆり結し人こもあに在事持

こりれし冬議在馬持日未  
控中納言しつら二おろ文れ  
ゆし思ひこられてやまひか  
こりあつらと死しと死  
大納言しつらあつらと死し  
せれいもおつらと死し

紅梅右衛門

はつらのおと

八九ろりおと

殿上とゆらこ

し年サおと

以お梅し梅擦

大納言もけつら

女を信しあつら

掩約のまけつら

の目しおと

さこつら

く

西原景殿 廿一  
紅梅し長文  
へまりお

中君 母月

大丈 母榎上

紅梅乃をしハ  
こつらおと

殿上とゆらこ  
えいりつら

のまけつら  
たつら人

たり

控中の言しとぬくうれとこふれ御  
りてなすはつり戸つりあをる  
ありこの人々のあつり

右中將  
藤宰相

葵上 母致仕大臣同

さうつふのあつに十六おく源氏志  
十二あつえ眼乃よりあひかふ  
あついり夕霧大將とあひを  
きつ八月十日とを早もあひ

この二人夕霧乃甲と此  
六君り無甲乃まうい  
そち終り身にてあつ  
人々きつれこの人々

とつり

左大弁

相子此控大納とあつり  
あつり此一東大弁事  
とつり人

中將

荒人サ將

二乃二人夕霧此おとの  
きんたらあまきとあまき  
終一時あいらうたはじ  
おらのあまきとあまき

玉崎尚侍

又月のあまきとあまき

終一年母うおのあまき  
てあまきのあまきとあまき  
はくくあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき  
あまきとあまきとあまき





ふをうけくあまののちとらぬ日。ふとてくけく  
ていせらにふねのみくせうせいといふあまをい  
とらやあかそとらねのそらくまねまといふ  
うらうらり所をたてうらうらり也

二条太政大臣

朱雀院乃成其のらり。ふたは長出々此あり。政官の  
うせ給きまふよのうらふ。あまのらりうらうらり

頭弁

何れも此事。有統くれを給く。のらうらうら  
世中すまうらうら。あまのらり。あまのらり  
うら内。あまのらり。あまのらり。あまのらり  
あまのらり。あまのらり。あまのらり。あまのらり  
あまのらり。あまのらり。あまのらり。あまのらり  
あまのらり。あまのらり。あまのらり。あまのらり  
あまのらり。あまのらり。あまのらり。あまのらり  
あまのらり。あまのらり。あまのらり。あまのらり

醍醐景康也御

朱雀院位乃時。あまのらり。あまのらり。あまのらり

大和言

四位中将

左中将

これ二人源氏乃中ねおりる月よれりのふりてらや  
あたらひのまかりておのろんのくろゆとくしやうんせ  
終小弘殿あよりいあまふ終一はをさうせし人

義人がね

うにおとく者のえん一終一とたもん一れじ一今一まを  
一たけ一う一ろいりあはと流せうそくや一くのいんれ  
をたをひとすいとにいれ一いよのこれじとせんら  
ちしかり

弘殿殿太極

朱雀院法母ああひのそにいんれあらわしうせ終ふ

式部公文小方

第二十五母

師宮小方

致仕大臣小方

二母のりれと  
三東のられま母

曰君とつりりいれま母つれお梅のねとなよのらるなり

勝月夜為約

有慶花をんいん社をそく測酔のらきんい乃中お  
多ひのまればまに弘慶屋れくさゆい早くすいかな  
いことのおまきさぶらりりりれおいさくおのそな  
まことあおみくぶ人とせりるまおね整うとそま  
とそまきいんれくさひわいかなあまきとそま  
とらておまきいんれかよさのらとらとらとらとら  
いひい人の朱蔭院い集りてみりけとまきいんあまき

の二月ふさいし此みあつるはれしあはにあり源氏の  
ちね治平の海し三河に給しこの水ゆかり二葉乃  
に給しとくさるなり

左大臣

今と此治政りらまればはくさく右大臣とみもはれし  
左大臣とせんしと給つはれしとるしとるし

駿河大将

今と乃内むらこてう小右大将梅を  
左大臣としれし左大臣小右  
左と左ねとす新帝此ゆらるを  
け給るるを給しと給しとけけ  
しとみとる火とり此といひま  
人のららねとすりさいしとる

藤中納言

母又良女

まけつは此正月より  
母の内納のし此ゆら  
まうてたりし人

右兵衛督

母又良男

今と中納言たけつは  
此中納言北冬はれし

物したまひ

以中将

六条院源氏と頼と実と一と死母中  
日くくきまきまのまきくくく  
母ひあかり肉得のこ此ははりひひり  
てあくとをくあふくきんおとあす  
たらいてくまひくくあつるすく  
くあはれあてくくあひのりく  
あらくれてんくそまろりしん

西音殿女御

今此法く朱雀院女御と乳とせ  
始つばくくみくく

冷泉院女御

くこの法と死ありがあふくくく  
くくくくくくく

右大臣 母

年右中弁にけく  
小右大臣とくく

頭中将

年右中弁にけく  
以中ねとく

橘将上 母 幼き日

日く乳乃あに堂乃  
あひあはれあひあひ  
あひせあひくくく  
紅梅のあひあはれ  
大御とくあひく  
くくくくくく  
あひあひあひあひ  
あひあひあひあひ  
あひあひあひあひ

右大臣

大蔵口

源理直

これ二人が御のむすひの流  
くさくさはあつあつ

友左衛門御

今上と申すは此流時より系  
かたりし西石の中宮に  
にされぬくさくさつて世中  
物と申すはくさくされ  
くさく二文くさくさつて  
を流したくさくさつてを  
流したくさくさつてを  
くさくさつて

くさくさつて

くさくさつて

くさくさつて

くさくさつて

くさくさつて

冷泉流御 母玉

早き御のくさくさつて

流へ来りくさくさつて

女二宮の西母りくさく

のおくさくさつて

中将御のくさくさつて

くさくさつて

一人

尚侍 母

たけのくさくさつて

をくさくさつて

て内へ来りくさく

大信

入道播磨守

いとを馬の中ぬちふ中ねと  
ありてこりまのこにぬち  
はくそくそやこゆりのあそ  
ものうくそてはわしれはふ  
おろしてやししんぬちれ  
をり源氏乃大将とぬの

明石上

母友中督文れしよ

言んしれしよひ  
うち文たわのあそ  
い仕路の泣息ぬし  
しちあたり中文と  
こそそつりてね風  
はしとされてみそ  
のりしよめさ  
はしおとらにふ  
しよしよめ乃西  
やろし

いとを馬の中ぬちふ中ねと  
ありてこりまのこにぬち  
はくそくそやこゆりのあそ  
ものうくそてはわしれはふ  
おろしてやししんぬちれ  
をり源氏乃大将とぬの

梅家大印

相立書文衣

源氏乃母友のあつりた信れおとわしし入居のせら



有流汰と此の文衣いふらん〜とうみと流  
ととせとの物夏とせぬぬをういひたりあえ  
ほ〜給〜ときいふらふまゆゆららら〜の  
う所す取之信り〜のゆ〜とふあま〜  
のかた〜と〜れてとまらぬ多い〜事な  
れやうま〜このた〜と〜のま〜たり

雲林院律抄

きん〜と〜秘流〜ころりか〜り〜時六十是と  
いふ文〜給あ〜のなま〜あ〜と〜む〜  
ま〜給〜らん〜れ〜ら〜く

大信

宇治文抄

おとゆん

いぢち二人とてを記して〜いぢちとせ給

二人が〜小名給〜宇治乃抄〜り〜  
お〜と〜や〜と〜ち〜す〜う〜れ〜信〜給〜と〜の〜あ〜ま〜  
ま〜ら〜な〜の〜い〜ら〜と〜の〜お〜と〜ち〜あ〜り〜せ〜ら〜れ

らひーい

紀伊守母とのあまれば

ふれ大おーはうまうりし小野と  
おれ君れきー小大おおりあけ  
さ海かとうりし人常徳介ら紀伊守  
いりやうり

常徳介書

じりー中おの君とて文ー作ーとおの音とを  
のらとれくがい多いふあもあひら君  
じりー文れはうきよておれいふさ海あ  
それと常徳介ふりてまもあまら

左中弁

弁后

母ーとまれ左中弁おれとの小徳と  
とらうらふ大おーじりーの  
いひまうせしれくおりあけ

あついでうらせ給くあまのあついで  
さきさきいりてあついで

左大将

醍醐景敏也

梅ええ小みそあついで

梅ええりてあついでへあついで

大将

左道中将

常陸介いじこ中ねじりの大将なりと

しりやあついであついであついであついで  
あついであついであついであついであついで  
あついであついであついであついであついで  
あついであついであついであついであついで  
あついであついであついであついであついで

梅安右大和言

女

むらあまのあついであついであついで

しんごうはきかひしりたふしあく  
ちきりしきりしはけのあまひり  
あひまはしりしきりしあまひり  
しんごうはきかひしりたふしあく  
あまひりしきりしはけのあまひり

梅窓大納言

五節者

二条五兵衛より惟光御后  
お前よりみせらういしき

おしるにみせのまのしりたふしあく  
あまひりしきりしはけのあまひり  
かり

右清門塔

左米作

とらふのこしきりしりらせのたふし  
あまひりしきりしはけのあまひり  
とらふのこしきりしりらせのたふし  
あまひりしきりしはけのあまひり  
とらふのこしきりしりらせのたふし  
あまひりしきりしはけのあまひり





参議宮内

四石乳母

母を流さる

ら此宰相いあへなるる一人ありてなまもせしす  
形さ海さく人のことうみさふさきう捨て海兵の文  
はく時くもことなるありしあやうはありれやえ  
乃時くさひとりてれくはさすうみさうく  
るさうり松風いひさきさるんくそのりれ

三位中将

くさくせがみよたといゆり海一みさう

存孝お

夕良のうくのせち

宰相君

まろくらの内侍うくさき屋の家流すすみ娘くくりえ  
あさうりまきくはあひりたおあひありさぶ人あれい

さぶくまのり〜れんま〜な〜さ〜ん〜ん〜ん

夕白上

政は乃昔〜苑人がおと方〜〜り〜り〜ひ〜  
玉は乃れ内納の〜〜〜〜あまよれ物候〜  
〜とあぶ〜〜人〜〜〜み〜ありはら〜  
ゆ〜の〜り〜〜〜の〜お〜あ〜あ〜  
れ〜あ〜い〜て物〜〜〜〜〜〜

大宰大貳

〜と海〜三所〜終〜〜り〜り〜りのり  
〜と海〜の〜も〜も〜り〜り

筑前守

じ〜海氏の流〜し〜あ〜  
苑人おれ〜〜〜と終〜  
又の天武乃終〜の〜あ〜  
と海〜り〜り〜り〜



皇帝君

源氏むらあひみけ人  
ら此大武さうてはく  
下河の源氏此書人の

兵部大輔

大物命

四乃々春いこく父このじい人こま  
此流るるるるるるるるるるるる

そらねくらの物さうさうさう  
あすのね子いまなしてはく  
いあまうら此さうすあう  
此さうのやれねあうじいひるれ  
まじあうとくはくさ

播磨守

このしうさうたは物さうさう

源良清

城克一このあ

五世若

くみまひつすま死をうしきひん

しつしつされれ早に死入あくしつゆりおふ保成より  
やえのと死出ふくあしれ入るじとちれ物終りし守  
と海の流れりきあるれ早に保が物とときこあど  
けくしにゆけいのすけとみしきまては日あ夜と  
まじりおちちい中弁少くを望み保けておまは  
そまじりつ保成しつしつとあつらひあられつこ  
あつて下りつらふあしれいしきまかりし入

伊豫守

死院くれませかく後常陸くあく下用屋小のり物  
巻しうせぬう成とるふまふのわくこま

紀伊守

源氏中將なりこの流中たる方のあつて官屋に回るふれ  
あ人たを物監  
源氏乃大物女院の流磐は始り日一夫一たり一人あり大物す

また浦へおしよさかひ一時度とれ流かこころれけい  
とてねこの所ともうきつひきまをまつつみやく  
也路こいぬのくく又花人ゆきのせいのなされね  
しつらりかぶ

花人がおま

うけせみの君れまじと見えきのこれちつられい  
源氏らせころおけのねあひかひ一人そのつらら  
これとれとじとすいといまき一人七五郎の花人がおま  
りかり

常陸介

年いふら此玉のこあけまやろ君れまじら  
宇治の文の中お君と関り一人れおとこなり

花人式了也

内乃内使少く自宮へ入りしはようあけまやろ  
花人右近お監母うらむれまじら  
くむおおむしれゆりおせりて花人を君れまじら



及すくたそまう  
とあきまこと  
てまてあま  
あまうま  
まもりの心をき  
る

二部

は二人はくたそまうてあま  
ありつきふれあまのあまのあま  
くてあまのあまのあまのあま  
すあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま

御清浄

あまのあまのあまのあま  
のあまのあま

兵丁君

これあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま

大臣

六条御息所

十六あまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま

じせり十九少くぬまーおれあてまうりてお  
少くしとちれお宮おうて作跡へ下給う  
さよまひんさうりみとぬくーお宮おりのませ  
あーとちてみやへぬのやうりまおれお宮  
なまひーとちとくお宮おれお宮おれお宮  
ちりちりさうせぬぬ海乃乃おれおれおれ  
おれけても少くありおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれ

お山のおま

お山おれおれおれおれおれおれおれおれ

小野乃大居云

小野乃大居云のあまきおれおれおれおれ

小野おれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれ

あーのおま

あまおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれ



山北さす

一 時光りたりそのかゝるいんとのりか  
まじり人きあひあひ

横川僧部

いふふひのあゝあゝのいふ文あまの  
時山のさすみとわいおゝあひかときれ  
かたあゝ横川北僧部とささゆいよゝゝあ  
い付四位のうね申文北法使あゝけ僧部  
あゝあゝいほいそゝい僧の考せらゝゝ  
のそゝゝいんたゝいゝいゝとさうけたり

小山乃ひ

人との大屋あれこなり  
源氏北君とさうもやいほいあゝいしん  
さうさきけりておゝ山北むらのいあそとれ  
いあけてとさみさうゝ

小山北僧部

かゝゝ北僧部と小山北こゝあゝあゝ  
いりまゝゝのそれがのゝ時さゝゝ  
いほらなをたゝゝあゝあゝあゝあゝ  
さうさきけりておゝ山北むらのいあそとれ



沖持備

冷泉院位乃法時一凡也為志也院と源氏  
北院のいふく思ひ給ふ事と沖持備と  
せむりし人け人けしむの傍知とも

小野乃律師

一東宮とん赤井の守や給ふ時ひ急れ  
りしらくてとよのくしきしきくがひ  
夕霧のよきしきしき

宇治の律師

幸いあふりしきしきいのみまに  
たりうらまそく此交りしきしきの  
かりまいめんしきしきしきしき

御導師

人之董志大ぬら此交とらしきしき  
時このかきしきしきしきしきしき  
言んしきしきしきしきしきしき  
と此此此此此此

妙法寺別當

ちしおとのい海ひきみれきしきしき  
この大ここれう物なしきしきしき  
かりしきしきしきしきしきしき

男ふ治身不問

中務乃宮

夕霧此におもゝ宰相乃中將と聞〜時娘乃  
非君〜言〜きや〜人

上野此宮

今上御門世の  
文乃活事此〜き〜海〜日中務乃  
宮と〜ん〜ら〜き〜ひ〜あ〜み

中務の文

此〜時〜ん〜ら〜あ〜ひ〜あ〜や〜ま  
〜ん〜ん〜ん〜ん

梅之身此左大臣

今と女之文此活時此娘を〜ん〜せ〜とあ〜の  
娘君氣りか〜お〜り〜て〜ひ〜さ〜り〜人

竹川此左大臣

夕霧此の活子宰相中務乃〜ん〜とあ〜せ〜ん〜  
なり〜時〜ん〜ら〜人

左大臣

〜み〜ら〜此〜時〜の〜と〜れ〜も〜ん〜ら〜君〜喜〜海〜波〜ま〜  
〜時〜の〜時〜の〜れ〜み〜ら〜地〜り〜さ〜て〜活〜か〜ら  
〜り〜い〜小〜ま〜ま〜ま〜れ〜て〜れ〜活〜前〜乃〜ま〜ま〜と  
〜り〜て〜さ〜〜〜人

右大臣

〜れ〜の〜是〜を〜ま〜ひ〜〜り〜て〜大〜乃〜た〜い  
〜り〜人

此中務乃文

あ〜乃〜乃〜乃〜君〜此〜禮〜又〜大〜井〜此〜乃〜乃〜の

民平此大捕乃君

左馬の侍

大納言

中宮太史

左馬の侍

右馬の侍

桑議院理太史

左馬の侍

頭中將

民平歸

わがこい急は文此汝すこふり

大井の御よりこころし此田をここの令  
Pあひりりりり

ありまきとの文字取てお取此令あり  
ときこらりり汝侍うこまりあひりり

は二人よりあまのりをもつての文字取乃  
中御こくぬじりり一集りあひりり

これ二人のみら此取のこころしあひりり  
ならん此中にこころしあひりり

あのおをせれきにあまのり入内乃を以せり

これ二人の侍りの令れ旨言ん乃由車乃  
きりりりのりりり

まがりの言んあくの耐さちおと座り  
きりりりりりり

太宰北太武

よもぎよのまじり大はこたりをばくく  
われを染つじくれの居れをつるのあは  
の心かゆくこりここの人れお言あり

右大弁

相奪乃まじり傳平れ君乃ぬうらんた  
てこまへりあをせむり人こくこあ  
の相弁れ座りこあひくさこのよれすこ  
くんとそく相奪れ目とこまへり人こくさ  
りきりれおし流きんあこの日作文の  
と一人おしあこくこくこ

左中弁

秀人の弁

けふこくおなりあり時染氏のあは  
言こひこちれまふこく流こくさ  
かひり人

荒人の弁

おんこの言れおしり乃流渡あく月の  
とじ川のそらなれおれまはとあり  
ゆかこくまうてまり人

源中将

二お乃交のあたられ君ととぬくおひり人  
もん由約のこけこあはとすきこくこ  
人こくからおれまはこくこ

源理の人ま

大考口

たとりがね

中宮権の外

るの取

藤式了忠

文章博士

式部了兼

大内記

荒人式了の忠

源氏乃君清宣等々のとらぬくそなかり  
人きりつらういふ

多あらんせう一書院より女文れは乃清  
くく清急早もくつり後一人

秋このし中交より女これ文一書院の時三  
きりくのぬし流をうういふれこなり  
かひ一書院いふれのとらぬく

うあれはたあま長の志れうた六ゆい  
くいろうとんれの事又いふきつる女の事  
うう一人

二書とあま長れ物ううにういふ  
早とれ女の事うう一人

これ二人ゆあまり入学のとら作又  
うう一人

夕暮れはと大書の君といひ一時の流  
師く物ううとらうとらうとらう

おううの流りり時きう一えう源氏の

るのまじ

太政大臣へ奉りせしむ 勅使に

聖旨のまじれりしに 轉りおのまゝの  
申おと聞し 時風さつに 村を 備ふ  
少しや せしむ 文と 吹く ねらふ  
けげ かの 井れりの こと けい  
時を けい せしむ かの こと けい  
さしむ せしむ けい せしむ けい

筑前守

原氏大貳のまじと 乃うに せしむ けい  
ありし 左衛門のまじと 乃うに せしむ

泉乃乃司

おりる 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃  
おりる 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃  
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃  
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

右をれ大吏

ゆよま 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃  
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃  
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃  
乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

大和言  
右を北太史

大和乃と

大荒の大物仲伝

朱雀院のらくく人此かかむ北太史との人  
かり大北太史にんくの流もわく玉る  
の流くく事くく流りあれりり  
りり北くく事のをさそけり一もそ流く  
とり一もか  
一糸の文北せり一やうり君のせうとんや  
とんと一ものといくく何事とやかり  
あひり  
るは大将の言人あつひの君らせうと

右雲北守守時

因幡乃と

大史の物語

まき一終りてる山より宇治へ流るるま  
人よりの事しむまきくくつひ  
少りよきてあつひのこがひり流り  
宇治へ流るひせり人  
あつひ言てあつひの君成ねをみりて  
よりをらに流りり流りいさあひつ  
ねとゆり流りいさあひつ  
けり一北太史の團りいりり一終りり流  
るものかり玉るくく事あつひ

平乃重經

式了れが物道定

女房のくみ草芥不曰

なれりてはえんとて人  
わしれ中文のまゝいふのまゝのまゝ  
えまゝいふのまゝいふのまゝ  
わしれ中文のまゝいふのまゝ  
ありて人  
平乃重經なりまゝいふといふと流し  
く式了れのまゝいふのまゝいふのまゝ  
まゝいふのまゝいふのまゝいふのまゝ

先帝此夜の宮

藤原景友の御

花らぶさとのと

前母院

一条宮と心

式了れのまゝいふのまゝいふのまゝ  
まゝいふのまゝいふのまゝいふのまゝ  
花院の対り草芥花らぶ所のまゝ  
まゝいふのまゝいふのまゝいふのまゝ  
心はまゝいふのまゝいふのまゝ  
まゝいふのまゝいふのまゝいふのまゝ  
あつてはまゝいふのまゝいふのまゝ  
まゝいふのまゝいふのまゝいふのまゝ  
一条宮の対り草芥花らぶ所のまゝ



つしゆのまはれ小宮  
紅梅大臣此のこ  
桐意内侍のしげ

うらり命婦

せんーの君

ゆき乃とやうめ

平内侍

侍江の内侍

が将の命婦

大江の内侍れとけ

中將乃命婦

兵束の命婦

まはれとよにぬわのこはなをみとあり  
姫君二人のちやこころいのみはれりなる  
りやく日れ文の波事さりつふれうのふ  
あつとあつとゆいりさうせーく  
源氏乃君はきんあつとあつとあつとあつと  
ちりき大らきさりてはさうさうりく  
冬は宮内此れさあつとあつとあつとあつと  
きりけのあつとあつとあつとあつとあつと  
むとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

これ二人あつとあつとあつとあつとあつと  
いひくらなりーく

け二人あつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと





宰相の君  
中将乃君

功なり月夜此女層源氏流りて  
わさふれさいおんの女層源氏を棟院り聖殿  
層流みあやうもけ人のこころけらん

中納の君  
中務此君

二条院より源氏の流りてさあひひくは流りて  
流りていんちりてはと海の流りてひのりて  
よりむくさ流の流りてわくくしてはうまう  
せふいす

中将乃君

しうあきれらの女層らんこれがそ又の

かゆの君  
サゆ此君

賀茂のゆりの日源氏乃君あひと  
事このゆりそよすまにこれとのゆり  
あもそよゆりのゆりみくさわやい  
人もん一の流りいん

とあつじ花の女層流りてをさう  
あうらら此女層ひちちささいあうら  
院へひらこれ多さいと流りてあうら  
なとらら流りて海り

かゆ乃君

一乗の文此女層ゆあひりのわくらら



いぬま

むらさきのつれづれはあはれあはれ  
なり一人

あれま

玉のつらねくさくさいさきも  
一輪一輪あはれ花白いあはれ  
一ひさりの泣くつなり

宰相のまろん

おれ一やふひちあはれあはれ  
こしらあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
おれあはれあはれあはれあはれ

大吏のまろん

いけのみさきにあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

大物の君

あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

右近の君

あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

左近の君

あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ



一入 あつねれ物つららむとせむのこころをいふにきかぬ

かといふらちのこころをいふに

一入 おれこころをいふに物つららむとせむのこころをいふに

こころをいふに

一入 夕ふれ宿りありありとせむのこころをいふに

一入 日もしつとたのきくにほひをいふに

あつねれ物つららむとせむのこころをいふに

一入 中川もつららむとせむのこころをいふに

あつねれ物つららむとせむのこころをいふに

一入 二つとせむのこころをいふに

あつねれ物つららむとせむのこころをいふに

一入 一つとせむのこころをいふに

あつねれ物つららむとせむのこころをいふに

一入 二つとせむのこころをいふに

あつねれ物つららむとせむのこころをいふに

一入 一つとせむのこころをいふに

あつねれ物つららむとせむのこころをいふに



主君の人

一入 湯氏勝春をわひ給しあるまじうひのこころのあはれ

一入 ことつじれぬるへきあはれり此流はくひまりしや

一入 栞をすあさうが此流より流氏へたきよめらるせれ

流氏人の女

一入 ありぬのまよりらるるまのあはれはけしうはあみら

流氏人の女

一入 流氏人のあはれは流氏らまきかまじうくくあ

一入 をもれおにあまこのじ中交りらるるま

一入 ときこのあたまはあはれなりしう

一入 玉はら流君のまはるるのあはれしう海

二葉とのひ

一入 いちちれをけしすまに契をくく

一入 管れおるる二葉流のしうまのあはれ

一入 玉らるれらるるいじやうのま

一入 中ふがれおにまらん夕魚とくをま



一入

小野ま〜〜ま〜〜の君と梅〜〜や〜〜

二入

〜〜と〜〜せ〜〜あま

三入

〜〜と〜〜大あま君と〜〜梅〜〜

四入

〜〜と〜〜のり〜〜

五入

し〜〜の〜〜の陣〜〜

六入

山れ傍旅の〜〜の大〜〜

七入

〜〜と〜〜

八入

〜〜と〜〜のり〜〜

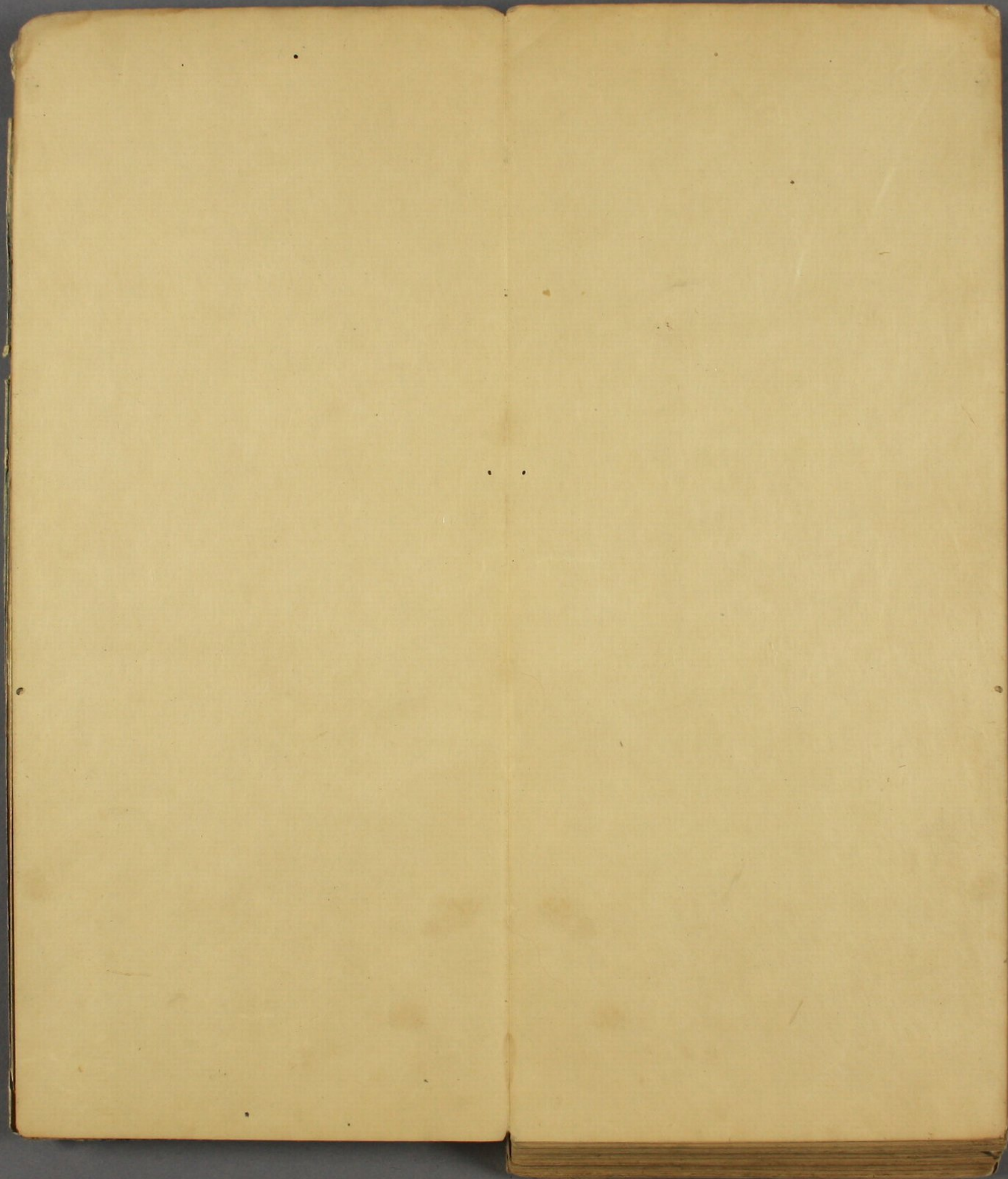
九入

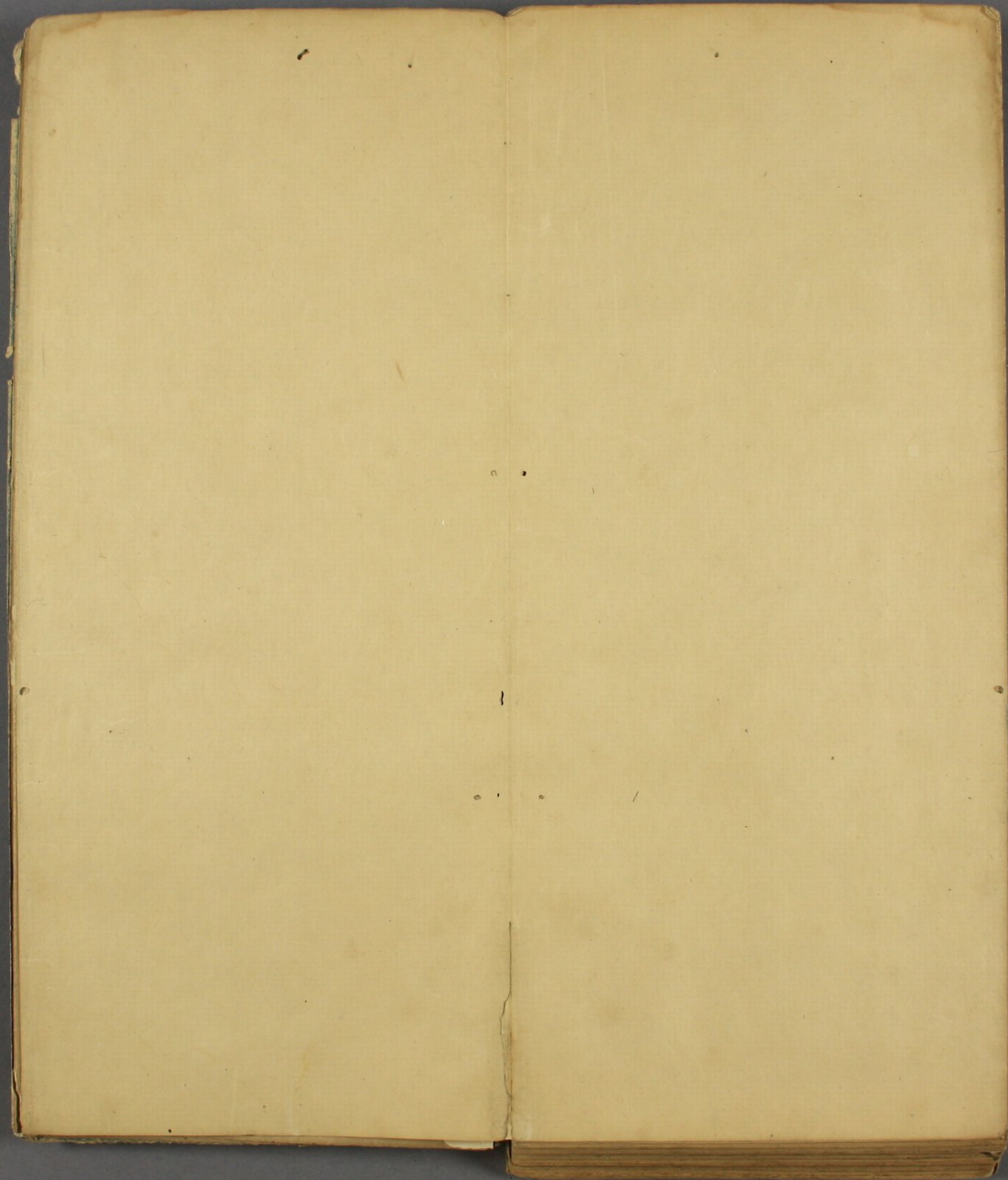
お〜〜時火〜〜あ〜〜

十入

字源の大い君なや〜〜と〜〜







以思

婦公

去風居

意年

